

メッセージアウトライン 創世記19:1～38「ソドムとゴモラのさばき」

[1] 「その二人の御使いは、夕暮れにソドムに着いた。ロトはソドムの門のところに座っていた。ロトは彼らを見ると、立ち上がって彼らを迎え、顔を地に着けて伏し拝んだ」 「二人の御使い」18章でアブラハムに人間の姿をとって現れた三人の人物のうちの二人。アブラハムの前に最後まで残っていたのが主ご自身で、後の二人は御使い(天使)で先にソドムに向かっていたのであった。「ロトはソドムの門のところに座っていた」門のところは広場になっていて町の生活の中心であり、そこで裁判や商取引などが行われていた。かつてアブラハムと別れてヨルダンの低地を選び取ったロトはここではもう完全にソドムの住民となっていた。以前、メソポタミアの王たちの連合軍によってこの地方が攻撃された時、ロトもソドムの住民も共に捕らえられていったことがあったが、甥のロトの救出のために立ち上がったアブラハムの素早い攻撃で、ロトもソドムの住民も財産もみな取り戻されたことがあった。→創世記14章 それゆえ、ロトはアブラハムの甥ということでソドムではよい待遇を受けることができたと思われる。町の長老や実力者たちは町の門のところに座るのが常であったが、ロトもそのような人物の一人になっていたのかもしれない。そこに夕暮れ時に二人の御使いが到着した。これはソドムの様子を実際に確かめるため、そこに神を信じる正しい者が十人いるかないかを確認するためであった。もし十人いればアブラハムとの約束どおりソドムとゴモラの町は助かる。→18:32 しかし、いないならば滅ぼされる。

ロトはアブラハムと同様にこの二人に普通の人とは違う何かを感じたようである。

[2-3] 彼はこの二人を自分の家に泊めてもてなそうとする。二人は広場に泊まろうとするが、ロトはしきりに勧めて彼らを自分の家に招く。広場にいると町の人々から害を受けるといふ思いもあったかもしれない。

[4-5] ここを見ると、18:20~21で主が確かめようとされていることが、そのまま現実であることがわかる。

「知りたい」性的関係を持つこと。(男色、同性愛) 「若い者から年寄りまで」町中がこうした雰囲気支配されていたことがわかる。カナン地の性的、道徳的に墮落していたことがよく知られていたが、ソドムとゴモラはその最悪の例であった。

[6-8] ロトは最悪の事態を避けるため彼らを守ろうとした。ここには自分の最善を尽くそうとする彼の誠実さが見える。しかし、彼は客人たちの安全と引き換えに自分の娘たちを暴徒たちの前に差し出そうとした。これは娘たちの父親としての責任の放棄であり、道徳的感覚の麻痺であった。一つの罪を犯さないために別の罪を犯してもよいということはない。これは彼がソドムを選んだことの一つの結果であった。

[9] ロトは町の人々から尊敬されていると思っていたかもしれないが、それは幻想だった。彼らはロトに対して少しの敬意さえ持っていなかった。ソドムの住民のロトに対する悪

感情がここにきて爆発した。ロトも多少はソドムの人々の悪を批判、非難していたのであろう。それも含めての反発である。世間はこの世の流れに合わせる世的、肉的クリスチャンを喜んで迎えてくれるかもしれないが、彼が何か彼らの意に沿わない言動をしたり、失敗をしたりするならば、たちまち手のひらを返したようになって襲いかかるのである。

[10-11] ロトは客人を助けようとして、逆に彼らに助けられる。家の中に引き入れたのはソドムの罪についてロトはそこから退く以外に方法がないことを示している。「目つぶし」強い閃光であったか。人々は一時的に目が見えなくなり、ロトの家の戸口を見つめることができなくなった。

[12-14] 二人の御使いはロトに身内の者をこの町から連れ出すようにと言う。婿や息子、娘、その他身内の者である。「私たちは、この場所を滅ぼそうとしています。…」(13) 彼らはこの町に来た目的をはっきり告げた。ソドムとゴモラの罪は全く弁解の余地のないものであり、これに対してはさばき以外の何もものもないことが明らかにされる。「娘たちを妻にしていた婿たち」(14)これは8節からわかるように、まだ実際の結婚生活には入っていなかったようである。しかし、ロトはこの二人の婿をも救い出すことができなかった。彼らには悪い冗談のように思われたのである。

[15-16] 「夜が明けるころ、御使いたちはロトをせきたてて…」(15) ロトはためらっていた。婿たちがついて来ないこと、彼らと娘たちを別れさせなければならないこと、またソドムにあるたくさんの財産への執着といったものがあつたのではないか。彼はまだソドムの滅びということの意味をよく分かっていない。彼も、妻も、娘たちも救われるために御使いによって強制的に連れ出されねばならなかった。これは主の彼に対するあわれみによることであつた。(16) 前日に遠くのマムレの地でアブラハムは主の前に立って必死でとりなしをした。そして主は十人正しい者がいたら滅ぼさないと約束された。しかし、そこには十人いなかった。ロト一人をのぞいて誰もいなかった。妻や娘たちも信仰を持っていたとは書かれていない。彼らはみなソドムの悪、不信仰、この世的繁栄、道徳的墮落という生き方に流されてしまつていた。

[17] 「いのちがけで逃げなさい。うしろを振り返ってはいけない。…そうでないと滅ぼされてしまうから」

これは急がねばならないことと、過去を断ち切ることへの要求であろう。特に自分の意志だけではソドムを離れられなかつたロトたちに対しては最も適切な警告であつた。

[18-22] ロトは毎日座つてばかりいて体力が衰えていたのか、あるいはわがままからなのか、山まで逃げるのができないので近くの小さな町に逃げることを願つた。(18-20)

御使いは寛大にもロトの言うことを聞き入れ、その小さな町ツォアルへ行くことを許した。(21)「あなたがあそこに着くまでは、わたしは何もできないから」(22) ここにさばきの確実さと救いの確かさとが並行していることがわかる。ソドムのさばきはロトたちが安全な場所に行くまではなされない。これも恵みである。

[23-25] ここでは主のさばきによるソドムとゴモラの徹底的な破滅の様子が描写されている。天からの硫黄と火でソドムとゴモラの町とその全住民、その地の植物に至るまですべて焼き尽くされてしまった。

[26] 「ロトのうしろにいた彼の妻は、振り返ったので、塩の柱になってしまった」

彼女は町の残して来た物、残して来た生活を惜しむ気持ちからうしろを振り返った。しかし、これは御使いが言った禁止(17)を破ることであった。それで彼女は塩の柱になってしまった。これは主のさばきによる超自然的な現象である。神のさばきには救いか滅びかのどちらかしかないことを教えられる。

[27-29] 「翌朝早く」とはアブラハムが主の前にとりなしをした翌日の朝のことで、ソドムとゴモラのさばきの当日である。アブラハムがソドムとゴモラの方を見下ろすと、その地から煙がかまどの煙のように立ち上っているのを見た。それで彼は主がその町を滅ぼされたことを知ったのである。しかし、アブラハムのとりなしと主のあわれみのゆえにロトはそこから逃れることができたのである。

[30-38] 「ロトはツォアルから上って、2人の娘と一緒に、山の上に住んだ。ツォアルに住むのを恐れたからである。彼と二人の娘は洞穴の中に住んだ。姉は妹に言った。『父は年を取っています。この地には、私たちのところに、世のしきたりにしたがって来てくれる男の人などいません。さあ、父にお酒を飲ませ、一緒に寝て、父によって子孫を残しましょう。』……」

この段落はその後のロトと二人の娘たちの歩みを示している。

ロトの娘たちはほかに男性を見出せなかったため父親と性的関係を持ってまで子孫を残そうとした。自分たちの家系の断絶を避けるためこのような方法が取られた。しかし、このような方法が取られたということは、ひとえに彼らがソドムに生活してきたがゆえの結果であろう。彼女たちが産んだ二人の男の子はそれぞれモアブ人とアンモン人の先祖となった。この二つの民族はやがてアブラハムの子孫であるイスラエル民族に敵対するようになる。

ロトがソドムで生活していた時はこの世的にはそれなりの地位や富もあり成功した人のように見えたかもしれない。しかし、その人がどのように成功したのかはその人の生涯の最後まで見てみなければわからない。その人がどんな感化を人々に与えたか、その家族は、その子どもは、その子孫はどうなったか……。富を貯え、地位を手に入れても、それゆえに家庭を破壊し、家族が主に従おうとしなくなるならば本当の成功とは言えないのではないか。今日でもどれだけ多くの人々がロトの足跡に従って、この世で富や地位、名声を得ようとして、そのために神を退け、父や母の願いや祈りを踏みにじっていることだろうか。私たちはロトの生涯から十分な教訓を学ばなければならない。

アブラハムは生涯、天幕生活を続けたが、主の豊かな祝福をその子孫に残した。私たちはロトのような生活を送って、私たちがこの世を去った後に、さばきが子どもたち、子孫たちの上に臨むような生き方をするのではなく、アブラハムが常に主に頼り、主の

守りと導きと祝福をいただいたように、どのような時にも信仰を持って主により頼み、この世的、物質的なものではなく本当の恵みと祝福をいただく者になりたい。

→ルカ9:23~25,ヤコブ4:13~15,箴言16:3,ピリピ4:19,マタイ6:24~34